朝日新聞（2020年2月25日付）
掲載記事は朝日新聞社の許諾を得て転載しています。
朝日新聞社の許可なく再転載することを禁じます。

天声人語

一風かわったカルタを手にした。すべてが認知症にちなむ札なのだ。たとえば「ふ」。「ふらふらと歩くことにも意味がある」。解説も付いている。出歩くのは目的あってのこと、「まずは話を聞いてみましょう」と呼びかける▼日本福祉大学（愛知県美浜町）の学生が子ども向けに作った「にっぷく」にこにこカルタ」である。指導した斉藤雅茂（しげ）・准教授(39)は「この春卒業する女子4人のアイデア作品。小学校や高齢者施設から引き合いが増えて、市販されました」▼「ぬ」の札は「『盗まれた？』一緒に探してみようね」。絵札では、指輪をなくして焦る女性を男の子が励ます。「み」の札は「見つけようおばあちゃんの得意なこと」。編み物を楽しむ患者女性の姿を描いた▼学生たちが心がけたのは、医学知識を並べず、「自分は認知症になりたくない」と思わせないこと。認知症患者の家族に教えを請い、周囲が誤った接し方をすると症状が悪化することも学んだ▼ボケだの痴呆（ちほう）だのという呼称こそ改められたが、認知症に対する誤解や偏見はなお残る。かく言う当方も、親族に症状が表れたときどう対処してよいか自信がない。子ども向けカルタではあるが、気づかされることも多かった▼絵札はどれも素朴で、読み札はどれも平易である。中でも気持ちが温かくなったのは「わ」の札だ。「わすれても大丈夫、僕が覚えておくよ」。将来もし自分が患者の一人になったとき、誰かに言ってもらえたらどれだけ心強いだろう。

2020・2・25

（許諾番号:20-1310）